Osaka University Knowledge Archive

Title	古今集時代における「松を引く」表現の出現 : 子日行事との関わりを中心に
Author(s)	蒲, 姣艶
Citation	語文. 2019, 113, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77683
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

古今集時代における「松を引く」表現の出現

――子日行事との関わりを中心に――

蒲　姣　艶

一、はじめに

松という歌材は和漢ともに愛誦され、古くから用いられている。しかし、「松を引く」表現は古今集時代[1]にならないと、見られないものである。古今集時代においては、次に示すように、紀貫之、凡河内躬恒に「松を引く」和歌が六首確認できる。なお、①②では、霞がたなびくことと、引く松とが掛詞となっている。[2]

延喜十七年[九一七]の冬なかつかさの宮の御屏風の歌

子日

①春霞たなびくまつの年あらばいづれの春か野べにこざらん

（『貫之集』・91番）

延長四年[九二六]九月法皇の御六十賀京ごくのみやすどころのつかうまつり給ときの御屏風のうた十一首

ねのひ

②花にゝずのどけき物は春霞たな引のべの松にぞ有ける

（『貫之集』Ⅰ・190番）

天慶六年[九四三]四月のないしの屏風のうた十二首

③ちとせといふ松を引つゝ春のゝのとをさもしらず我はきにけり

（『貫之集』Ⅰ・512番）

内御屏風和歌はしめのねのひ[3]

④ねたく我子日の松にならましをあなうらやまし人にひかるゝ

（『躬恒集』Ⅰ・97番）

兼輔朝臣なくなりてのち、土佐の国よりまかりのぼりて、かの粟田の家にて[4]

⑤ひきうゑしふたばの松は有りながら君がちとせのなきぞ悲しき

（『後撰集』・巻二十・哀傷歌・1411番・貫之）

⑥『土佐日記』・正月二十九日[5]

正月なれば、京の子の日のことをいひ出でて、「小松もがな」といへども、海中なれば、かたしかし。ある女の書きて出だせる歌、

おぼつかな今日は子の日か海女ならば海松をだに引かましものを

とぞいへる。海にて、「子の日」の歌にては、いかがあらむ。

このように「松を引く」表現は古今集時代の和歌に初めて現れてくるが、この表現がどのような経緯で形成されてきたのかについては、従来明らかにされていない。『歌枕歌ことば辞典』『歌ことば歌枕大辞典』「子の日」と「松」の項目においても、言及されていない。[6] また、田島智子氏は子日について、古今集時代から拾遺集時代まで屏風歌に詠まれる和歌の型の変遷を辿っているが、「松を引く」表現の形成過程には触れていない。[7] 本論は「松を引く」という表現に着目し、この表現がどのように生まれてきたのかを明確にすることを目的とする。

二、「松を引く」表現と子日行事との関係性(1)

松は和歌の歌材として、『万葉集』から、すでに多用されている。しかし、古今集時代に先行する和歌例では、「松を引く」表現が見られない。

では、どのような要因があって、「松を引く」表現が生み出されたのか。それを考える上で注目したいのは、第一節で示した「松を引く」六首が、引用の囲み部分で示したように、子日行事と深く関わっていることである。子日行事と「松を引く」こととはどのような関わりを持つのか。その関わりの中で、どのようにして、「松を引く」表現が生れてきたのかということを追究する必要がある。

子日については、山中裕氏『平安朝の年中行事』に、以下の指摘が見える。[8]

この儀は中国から入ったものか日本民間のものか明らかではないが、平安朝に入ると、これがその起源はたとい大陸行事にあったにせよ、いつか外来思想は消えうせて日本化の一路をたどった。

山中氏によれば、子日行事の起源は不明であるとのことであり、また、倉林正次氏も同様の立場である。[9] このような研究状況に対し、北山円正氏は史料を追いながら、平安朝に流行し始めた子日行事のきっかけを、以下のように推定している。[10]

この遊びの貴族社会における普及は、残った資料から推測すると、宇多天皇の北野・船岡山への行幸が端緒であったと見なして良いかもしれない。ただそれ以前に子の日の遊びはよく知られていたのであろうし、一部では行なっていたのであろう。むしろ宇多天皇の行幸はこの遊びを風雅な催しとして仕立てあげたところに意義を認めるべきなのではあるまいか。世俗の習慣に風趣を認めて徐々に貴族社会が取り入れ、やがて自らの優雅な行事にまで高めたと言えよう。

谷口孝介氏も同様の立場から論じている。[11] 以下、この北山氏の

論を参照しながら、子日行事との関連の中で、どのようにして、「松を引く」表現が生まれてきたのかを検討する。

子日行事について記した最古の例は、以下の『万葉集』の例である。

二年春正月三日、召二侍従竪子王臣等一、令レ侍二於内裏之東屋垣下一、即賜二玉箒一肆宴。于レ時内相藤原朝臣奉レ勅、宣二諸王卿等一、隨レ堪任レ意、作レ歌并賦レ詩。仍應二詔旨一、各陳二心緒一、作レ歌賦レ詩。未レ得二諸人之賦詩并作歌一也

始春乃　波都祢乃家布能　多麻婆波伎　手尓等流流可良尓
由良久多麻能乎

（巻二十・4493・家持）

天平宝字二年（七五八）正月三日子日に、天皇が侍従・王臣などを召して、内裏の東の対屋の垣下で宴を開いたという記述であり、この例は子日の宴に関する最古例である。題詞にも和歌にも見える「玉箒」がこの宴と深く関わっている。

井上薫氏によれば、「玉箒」は蚕の床を掃くためのものであり、皇后が親蚕の儀を行う時に用いるもので、皇后自ら蚕室を掃うことによって、養蚕を奨励しその豊穣を祈ったとのことである。[12] しかし、このような儀式はこれ以降見られず、平安時代に行われた子日行事との関わりは窺えない。

また、『類聚国史』（巻七十二・歳時三）には、「子日曲宴」の項目が立てられており、大同三年から斉衡四年の例が挙げられている。[13]

平城天皇大同三年（八〇八）正月戊子。曲宴。賜二五位以上衣被一。正月庚子。曲宴。賜二侍臣衣被一。

嵯峨天皇弘仁四年（八一三）正月丙子。曲二宴後殿一。令二文人賦レ詩。賜レ禄有レ差。

五年（八一四）正月甲子。宴二侍臣一。賜レ綿有レ差。

八年（八一七）正月甲子。曲二宴後庭一。

淳和天皇天長八年（八三一）正月壬子。天皇曲二讌仁壽殿一。参議以上預焉。賜レ禄有レ差。

文徳天皇斉衡四年（八五七）正月乙丑。禁中有二曲宴一。預レ之者不レ過二公卿近侍数十人一。昔者上月之中。必有二此事一。時謂二之子日態一也。今日之宴。脩二舊迹一也。

ここに挙げられているのは「子日曲宴」の例であり、これらが宴の形で行われたことがわかる。子日について、これ以上記録に残っていないところから、恒例というほどの行事ではないと考えられる。更に、斉衡四年（八五七）の記事には、「昔者上月之中。必有二此事一。時謂二之子日態一也。今日之宴。脩二舊迹一也」とあることから、この頃までには、子日の宴会は既に廃絶していたのではないかとも考えられる。

同じく子日について、『類聚国史』の編者とされる菅原道真は、『菅家文草』365「早春、觀レ賜二宴宮人一、同賦二催粧一、應レ製」で、以下のように記している。[14]

聖主命二小臣一、分二類舊史一之次、見レ有下上月子日賜二菜羹一之宴上。臣伏惟、自レ觴二王公於正朝一、至レ喚二文士於内宴一、首尾

二十餘日、洽歡言レ志者、諸不レ及二婦人一、此唯丈夫而已。夫陰者助二陽之道一、柔者成二剛之義一也。況②亦野中芼レ菜、世事推二之蕙心一矣。爐下和レ羹、俗人屬二之荑指一。宜哉、我君特分二斯宴一、獨樂二宮人一矣。（略）

この序文は『本朝文粋』巻九・244にも収録されている。寛平五年（八九三）正月二十日余り、男性のみの行事が続き、女性にも参加する機会を与えるために、「宮人」を楽しませる宴を行ったという主旨である。この宴において、実際に若菜を摘んで、それを羹に和す様子は窺えないが、傍線部①に「見レ有下上月子日賜二菜羹一之宴上」とあるように、道真が「舊史」を整理する時に、子日に若菜の羹を賜う宴の記事を見たと記述されている。また、傍線部②では、若菜を摘み、羹を和すという世俗風習の中での女性の働きを称揚している。傍線部①②から、この序文は、道真が子日とその日の風習である若菜を摘むことを意識して書いたものであることがわかる。

以上の例から、北山氏は以下のように指摘している。

道真は何らかの誤認をして、「上月子日、賜二菜羹一之宴」があったと書いたのであろうか。想像をめぐらせば、子の日の行事には、「賜二菜羹一之宴」があるという認識をもっていたために、現在の宴と過去の宴との明確な区別をせずに、詩序を執筆したということなのかもしれない。あるいは、いつ頃であるかを明らかにはできないが、子の日の宴は「賜二菜羹一之宴」となって復活していたのであろうか。子の日の宴が再興したのだとすれば、それを働きかけたのは道真であろう。

菅原道真が序文を記述した当時の子日行事の実態は分からないが、子日に若菜を摘み、羹を和す風習があったのだろうと考えるのが妥当であろう。

同じ菅原道真による記述であるが、寛平八年（八九六）閏正月六日子日に関しては、『菅家文草』431「扈二従雲林院一、不レ勝二感歎一、聊叙レ所レ観」において、以下のような記述が見える。(15)

雲林院者、昔之離宮。今為二佛地一。聖主玄覽之次、不レ忍レ過レ門、成二功德一也。侍臣五六輩、翫二風流一而隨喜、院主一兩僧、掃二苔癬一以恭敬。供奉無レ物、唯花色與二鳥聲一。拜謝有レ誠、唯至心與二稽首一而已。予亦嘗聞二于故老一、曰、❶上陽子日、野遊厭レ老。其事如何、其儀如何、❷倚二松樹一以摩レ腰、習二風霜之難一レ犯。❸和二菜羹一而啜レ口、期二気味之克調一也。況年之閏月、一歳餘分之春、月之六日、百官休暇之景。今日之事、今日之為、豈非下為二無為一、事中無事上乎。予雖二愚拙一、久習二家風一、廻レ興有レ時、走レ筆無レ地。聊舉二一端一、文不レ加レ點云爾。謹序。

寛平八年（八九六）閏正月六日子日に宇多天皇一行が野遊を行なった模様が記されている。天皇が野外に出て子日行事をする例はこれのみである。北山氏はこれが「貴族社会における子日の普及」の「端緒」となって、これ以後、「天皇から受領・女房に到るまで、また都はもとより地方においても行っており、貴族社会では相当な広がりを持っていた」と述べている。北山氏の論は首肯

できるが、氏は主に子日行事の展開を追求して、表現の面には着目していない。ここでは、子日行事に触れながら、それと関連して、「松を引く」表現が現れてくる経緯を説明しよう。

寛平八年（八九六）閏正月六日子日の序文から、道真は「上陽子日」の実質を❶「野遊厭レ老」としながらも、子日の具体内容について、「故老」の言葉として説明している。子日行事の当時の状況はこの序文からは読み取れないが、道真が言う「野遊厭レ老」の目的を実現する方法として、「故老」が答えた❷「倚二松樹一以摩レ腰」と❸「和二菜羹一而啜レ口」との二つが提示されている。一つは❷「倚二松樹一以摩レ腰、習二風霜之難一レ犯」とあるように、松に腰を摩ることにより、冬の寒さにも色を変えない松の生命力を身につけようとすることである。一つは❸「和二菜羹一而啜レ口、期二気味之克調一」とあるように、若菜を羹にし、それを食べることにより、体の調子を整えようとすることである。若菜を薬草と認識していたのであろう。道真が言う子日行事とは、長寿を願うものであると考えられる。

この序文から、子日行事に、松と若菜との二つの題材が深く関わっていることがわかる。また、子日行事は野辺で行われることもわかる。では、寛平八年（八九六）年宇多天皇の子日野遊に見える松の例と、それ以降の古今集時代に現れてくる「松を引く」表現とは、どのように関わるのかということについて、以下、考察する。

三、「松を引く」表現と子日行事との関係性(2)

第二節で確認したように、北山氏は子日の遊びの平安貴族の間での普及について、八九六年宇多天皇の子日野遊が「端緒であったと見なして良いかもしれない」と述べている。また、その行事の内実を見てみると、子日野遊が若菜と松とに関わっていることがわかる。この子日の実態について、紀長谷雄による記録がある。[16]

以二未一刻一、乗レ輿幸二船岡最高之頂一。皇太子以下、騎馬相従。其儀如レ初。嶋中菓菜、遣猶□積。令三人留守、更俟二後召一。未四刻許、令三内豎〔　〕二菓菜一。仍即奉献。

この記述はかなりの部分が破損しており、意を取り難い箇所が存する。「其儀如レ初」についての具体内容は不明であるが、野で若菜の類を摘んで、天皇に献上したことがわかる。

また、延喜五年（九〇五）正月宇多天皇が大覚寺にて子日遊を行っている。この子日行事については、『日本紀略』に記録がある。[17]

廿九日戊子。法皇幸二大覺寺一。命下採二野菜一之遊上。左大臣以下扈従。喚二詩臣一。賦二即事一。云々。

延喜五年（九〇五）子日行事でも野辺で、「野菜」を摘んだようである。春の野辺に出て若菜を摘むことは古く習俗としてあり、寛平八年（八九六）子日野遊と延喜五年（九〇五）子日遊から、子日行事に若菜との結びつきも確認できる。一方、松と子日の関係性は、寛平八年（八九六）子日に、故老が道真に言う記述の中から見られるが、実際子日行事との関わりは以上の記述からはまだ

窺えない。

古今集時代には、子日を詠む和歌は計十八例ある。そのうち、若菜を詠む例は二例で、松を詠む例は十一例もある。古今集時代に子日に関わる松詠が流行したと考えられる。寛平八年（八九六）宇多天皇の子日野遊に見られる松の例が、その後の子日に関わる松詠に影響を与えたのだろうか。また、どのような経緯で「松を引く」表現が生まれてきたのだろうか。

その点について検討するために、ここでは松が生える場所に着目して考察する。『万葉集』における松詠の中で、松が生える場所を明記した例を【表一】に示した。

【表一】『万葉集』における松の場　計三十二例

松が詠まれる場所	用例数
浜辺	10
きし	4
山	7
いそ	3
いはほ	1
ひめしま	2
松原	1
ひばら	1
いはやど	1
みね	1
のなか	1

寛平八年（八九六）宇多天皇の子日野遊では、野辺の松に言及している。一方、【表一】から、『万葉集』では、松の生える場所として、浜・岸・山など様々であるが、その中で囲み部分で示したように、「のなか」が一例ある。その和歌を以下に示す。

長忌寸意吉麿見二結松一哀咽歌二首

磐代之（イハシロノ）　野中尓立有（ノナカニタテル）　結松（ムスビマツ）　情毛不解（コヽロモトケズ）　古所念（ムカシオモヘバ）

（『万葉集』・巻二・144）

この和歌では、松の生える場所は野中であるが、「松」に関して、「むすびまつ」と表現されており、ほかの『万葉集』の表現[18]と類似していて、「松を引く」表現の先蹤としがたい。また『万葉集』以降、『古今集』までの和歌例には、野辺の松を詠むものがない。

これに対し、古今集時代には、子日に関する松詠は十一首ある。その十一首を左に示す。

延喜十七年（九一七）の冬なかつかさの宮の御屏風の歌

子日

(1)春霞たなびくまつの年あらばいづれの春か野べにこざらん

（『貫之集』・91番）

延喜十九年（九一九）東宮の御屏風の歌、うちよりめしし十六首

子日の松のもとに人人いたりあそぶ

(2)春の色はまだあさけれどかねてより緑ふかくも染めてけるかな

（『貫之集』・127番）

延長二年（九二四）五月中宮の御屏風の和歌廿六首

子日

(3)もとよりのまつをばおきてけふは猶おきふし春の色をこそみれ

（『貫之集』・140番）

承平五年十二月、内裏御屏風の歌、仰せによりて奉る（九三五）

子日して、車のわかるる所に馬にのれる人、まつをくるまにおくる

(4)此松のなをまねばれば玉鉾の道わかるとも我はたのまむ

（『貫之集』・324番）

延長四年九月法皇の御六十賀京ごくのみやすどころのつかうまつり給ときの御屏風のうた十一首（九二六）

ねのひ

(5)花に、ずのとけき物は春霞たな引のべの松にぞ有ける

（『貫之集』Ⅰ・190番）

天慶二年さいさうの中将屏風の歌廿三首（九三九）

山里にすむをんな子日する

(6)あしひきの山べの松をかつみれば心を野べにおもひやるかな

（『貫之集』Ⅰ・417番）

延喜二年倭月令御屏風之料歌四十五首之内依勅奉之（九〇二）

子日野遊

(7)君がためおもふこゝろの色にいでゝまつのみどりをおりてけるかな

（『貫之集』Ⅱ・1番）

亭子院六十御賀、京極の宮す所つかうまつりたまふ御屏風の歌（九二六）

子日したるところ、松のいとちゐさきに

(8)ふたばよりとしさだまれるまつなればひさしき物とたれかみざらん

（『伊勢集』Ⅰ・74番）

八条大将四十賀、権中納言のし給（九二九）

子日松いへにうゑたるところ

(9)ちとせふるまつといへどもうゑてみる人ぞかぞへてしるべかりける

（『伊勢集』Ⅰ・184番）

内御屏風和歌、はしめのねのひ

(10)ねたく我子日の松にならましをあなうらやまし人にひかるゝ

（『躬恒集』Ⅰ・97番）

(11)『土佐日記』・正月二十九日

正月なれば、京の子の日のことをいひ出でて、「小松もがな」といへども、海中なれば、かたしかし。ある女の書きて出だせる歌、

おぼつかな今日は子の日か海女ならば海松をだに引かましものを

これらの歌で、松が詠まれる場所を明記しているのは、六首ある。その中で、(1)(5)(6)(7)では、囲み部分で示したように、松が生える場所は「野」である。また(9)では、松が詠まれる場は「家」である。

このように、子日の松詠には、野辺の松が詠まれるようになる。これは、宇多天皇の子日野遊で、野辺の松が記されたことと関わるのではないかと考えられる。道真の序で「故老」が述べたように、それ以前から子日と松は関係があったと思われる。そしてさらに、宇多天皇による子日野遊が、道真の序に取り上げられたことによって、子日と松の繋がりが強固に認識され、それが貫之らの松詠を生み出した要因の一つとなったのではなかろうか。

その一方で、寛平八年（八九六）宇多天皇の子日野遊に見える「倚二松樹一以摩レ腰」の要素は和歌には見られず、「松を引く」と表現されている。

では、「松を引く」表現は一体どのようにして生み出されてきたのか。それを考えるためには、まず「松を引く」ことはどのような行為なのかということを確認しなければならない。しかし、「松を引く」先例自体がないため植物を引くという行為はどのようなものなのか、を検討する。

(1)足日木能 石根許其思美 菅根乎 引者難三等 標耳曽結焉
（『万葉集』・巻三・414番・家持）

(2)真葛延 小野之浅茅乎 自心毛 人引目八面 吾莫名国
（『万葉集』・巻十一・2835番・詠者不明）

(3)伊利麻治能 於保屋我波良能 伊波為都良 比可婆奴流
奴流 和尓奈多要曽祢
（『万葉集』・巻十四・3378番・詠者不明）

(4)宇都世美波 恋乎繁美登 春麻気氐 念繁波 引攀而
折毛不折毛 毎見 情奈疑牟等 繁山之 谿敝尓生流
山 振乎 屋戸尓引殖而 朝露尓 仁保敝流花乎毎見
念 者不止 恋志繁母
（『万葉集』・巻十九・4185番・家持）

延喜十九年東宮の御屏風の歌、うちよりめしし十六首

五月五日

(5)あやめ草ねなかきいのちつけはこそ 今日としなれは人の引らめ
（『貫之集』Ⅰ・131番）

以上の例は、すべて植物を引くものである。より詳しく説明すると、(1)は菅の根を引き抜くことが難儀との意である。菅の根が地下で絡み合って、引きにくいということであり、ここの「引」くは、引き抜こうという意であろう。(2)は比喩歌である。私がいるのに、私以外の人が小野の浅茅を本気で引き抜こうとすることを歌っている。(3)では、引くということと、絶えることとの関係性から、引くことにより、元の場所から離れることを表現している。(4)は、山吹を谷から引き抜き、庭に植えるという意である。(5)は五月五日に菖蒲草を沼から引く例である。五月五日に、菖蒲草は戸に挿すか、薬玉を作る際に使われる。菖蒲草を沼から引くことは、沼から引き抜く意と考えられる。

これらの例から、植物を引くことは、植物を引っ張り、元の場所から離れる意であるかと考えられる。よって、「松を引く」ことも松を引っ張り抜く意であると考えられる。

四、「松を引く」表現の出現

既に確認したように、子日に詠まれる松は、概ね野辺の松である。そのため、「松を引く」とは、松を野辺から引き抜くことであろう。では、何のために、子日に野辺の松を引き抜くのか。このような行為は、子日行事が行われる場と深く関わっているのではないかと考えられる。

前述したように、子日に関する和歌は計十八首ある。第三節で確認した子日の松詠の十一例を除くと、残りは左に示す七例である。

▼『躬恒集』（承空本）

ねのびにまかりし人におくれて

362山たかみ雲ゐにみゆるさくらばなこころのゆきてをらぬ日ぞなき

▼『躬恒集』

ねのびにまかる人におくれて

365はるののにこころをだにもやらぬみはわかなはつまでとしをこそつめ

▼『貫之集』

延喜六年（九〇六）つきなみの屏風八帖がれうのうた四十五首、せじにてこれをたてまつる廿首

ねのびあそぶいへ

3ゆきてみぬ人もしのべと春ののにかたみにつめるわかななりけり

延喜十九年（九一九）東宮の御屏風の歌、うちよりめしし十六首

子日の松のもとに人人いたりあそぶ

127春の色はまだあさけれどかねてより緑ふかくも染めてけるかな

子日

140もとよりのまつをばおきてけふは猶おきふし春の色をこそみれ

子日

356春たちて子日になればうちむれていづれの人か野べにこざらん

子日

471かへるさはくらくなるとも春の野のみゆるかぎりはゆかんとぞ思ふ

第三節で既述したように、子日の「松」が詠まれる場所として明記されているのは、「野」四例と「家」一例である。また、第三節で確認した「松」以外の子日行事の和歌のうち、本節の傍線部に示したように、野辺で行われるのは四例である。以上の用例から、子日行事は野辺で行われることが想定できる。

一方、同じ古今集時代には、以下の用例も確認できる。

天慶八年（九四五）二月うちの御屏風のれう廿首

家にて子日したる所

①わがゆかでただにしあれば春ののわかなもなにもかへり

きにけり

（『貫之集』・536番）

宇多院に子日せんとありければ、式部卿のみこをさそふとて

②ふるさとののべ見にゆくといふめるをいざもろともにわかなつみてん

（『後撰集』・春上・10番・行明親王）

①は屏風歌で、その詞書に「家にて子日したる所」とあることから、屏風絵に子日行事が家で行われる様子が描かれていたと考えられる。②では、宇多院で子日行事を行うことが記されている。

以上の二例から、古今集時代では、子日行事が家で行われることもあることがわかる。子日行事が家で行われるようになったため、野辺から松を引き抜き、家に植えることも行われるのである。それは以下の和歌例からも窺える。

八条大将四十賀（九二九）、権中納言のし給

子日松いへにうゑたるところ

③ちとせふるまつといへともうゑてみる　人そかそへてしるへかりける

（『伊勢集』Ⅰ・184番）

④『宇津保物語』・楼の上下[19]

「あはれ、むかしを思ひ出ではべれば、あの岩のもとの松の木は、かの山に侍りしを、子の日におはしまして、引き植ゑはべりしぞかし」と奏したまふ。七、八樹ばかりして、上に平みたる松を見やりて、宮内卿兼覧

ひきうゑし子の日の松もおいにけり千世のすゑにもあひみつるかな

③は藤原時平の長男である保忠の四十賀算を、その弟である敦忠が催した時の屏風歌である。「子日松いへにうゑたるところ」との詞書からは、松を野辺から引き、家に植えるという様子が窺える。

④からも、子日に山の松の木を引き、岩のもとに植えていることがわかる。この二例から、子日に野辺から松を引き、それを家に植えるということが行われることがわかる。

また③では、松の千年の寿命に準えて、保忠の長寿を祝っている。④では、子日に引き植えた松の木も年月を経て、老木になっているが、千年の末にもまだ見られると長寿の要素を滲ませている。

寛平八年（八九六）閏正月野遊行事以後、子日に関する和歌では、場所を野辺と明記する歌が多い。一方で、家で子日が行われることもある。そして、子日行事が家で行われることにより、松を野辺から引き、家に植える例も見られるようになる。松を引き抜いて家に植える理由は、道真の序に見えるように、松の長寿にあやかるためであろう。しかし、道真の序の松は小松ではない。松を引き抜いて家に持ち帰る以上は、小松のはずであり、家に植えて、それの成長と千年の寿命に人の長寿を祈ったものと考えられる。

五、終わりに

本論では、古今集時代になってはじめて現れる「松を引く」という表現に着目し、その形成過程を辿り、「松を引く」表現が詠出された事情を検討した。「松を引く」表現は子日行事と深く関わっていると見られる。そして、子日という題材自体は古今集以前には見えないことから、これは古今集時代に新たに作られたものと考えられる。子日行事の端緒と思しい寛平八年（八九六）宇多天皇の子日野遊に、長寿を願う目的で、若菜と松との二つの要素が取り上げられている。その影響を受け、その後、子日に関する和歌では、若菜と松詠が定型表現となるが、その中で、松詠の流行が見られる。特に、子日に「松を引く」という類型表現が現れる。その表現は、子日行事が家で行われるようになったことにより、小松を野辺から引き抜き家に植えるという、行事自体の変化に影響されていると考えられる。その背後には、道真の序に見られる長寿の要素も働いている。小松を野辺から引き抜き、家に植えて、それの成長と千年の寿命に人の長寿を祈ったものと考えられる。「松を引く」表現には、宇多天皇の子日野遊や道真の序が関わっていたのであろう。ただし和歌の表現からは、それとの相違をも見出すことが出来、その相違点から行事の変化が窺える。

注

（1）本論文で言う「古今集時代」は、古今撰者が活躍し始め、『古今集』が編纂された宇多・醍醐朝から撰者たちが没する朱雀朝までを範囲とする。

（2）特に示さない限り、和歌本文・和歌番号の引用は『新編国歌大観』に拠る。そこに収めていない和歌例は『新編私家集大成』に拠り、濁点の補入は論者による。また、『万葉集』和歌の訓は西本願寺本に、番号は『私家集大成』に拠る。

（3）年次不明であるが、『古今和歌集目録』（群書類従本）凡河内躬恒の項目によると、躬恒は延長三年に亡くなった為、この歌はそれ以前のものと考えられる。

（4）『公卿補任』（新訂増補国史大系）によると、藤原兼輔は承平三年二月十八日に亡くなった。よって、この和歌はそれ以後の作である。また、詞書に「土佐の国よりまかりのぼりて」とあることから、『土佐日記』の年次と合わせて考えると、この和歌は承平五年（935）ごろの作であろう。

（5）木村正中校注『土佐日記・貫之集』（新潮日本古典集成、新潮社、昭和六十三年十二月）。この記述は承平五年（935）正月二十九日のものである。

（6）片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』（笠間書院、平成十一年六月）、久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、平成十一年五月）における「子の日」項（室城秀之）と「松」項（久保田啓一）を参照。

（7）田島智子「後撰集時代・拾遺集時代の特色―子日をめぐって―」（『屏風歌の研究　論考篇』、和泉書院、平成十九年三月）、初出「古今集時代から後撰集時代への屏風歌の変化―子日をめぐって―」（伊井春樹編『古代中世文学研究論集　第三集』、和泉書院、平成十三年一月）。

（8）山中裕『平安朝の年中行事』（塙書房、昭和四十七年六月）。
（9）倉林正次『饗宴の研究』（文学編）（桜楓社、昭和四十四年一月）。
（10）北山円正『平安朝の歳時と文学』（和泉書院、平成三十年十月）、初出「子の日の行事の変遷」（『神女大国文』十七号、平成十年三月）。
（11）谷口孝介『菅原道眞の詩と学問』（塙書房、平成十八年二月）、初出「宇多天皇雲林院子日行幸と菅原道眞」（『説話論集』第十四集、清文堂出版、平成十六年十月）。
（12）井上薫「子日目利箒小考」（『龍谷史壇』第七十三・第七十四、昭和五十三年三月）。
（13）新訂増補国史大系『類聚国史』（吉川弘文館、昭和八年～昭和九年）。
（14）川口久雄校注『菅草文草・菅家後集』（日本古典文学大系、岩波書店、昭和四十一年十月）。
（15）同（14）。
（16）三木雅博『紀長谷雄漢詩文集並びに漢字索引』（和泉書院、平成四年二月）。また、『日本紀略』（新訂増補国史大系）寛平八年閏正月六日の条にも野遊の模様が記録されている。

閏正月六日戊子。天皇爲二遊覽一。幸二北野一。午刻先御二各流（ママ）一幸二雲林院一。皇太子以下王卿陪云々。以二院主大法師由性一爲二權律師一。未時。更幸二船岡一。放二鷹犬一追二鳥獸一。

（17）『日本紀略』後編（新訂増補国史大系、吉川弘文館、昭和四十年八月）延喜五年正月二十九日の条に依る。
（18）『万葉集』では、「松をむすぶ」の用例は六例（141・143・144・146・1043・4501）があり、松の枝を結ぶことが詠まれている。その中で、「松の枝をひきむすぶ」和歌は一例あるが、それは松の枝を自分の近くに引き寄せて、その枝を結ぶものであり、本論での「松を引く」例とは異なるものである。
（19）中野幸一校注『うつほ物語』（新編日本古典文学全集、小学館、平成十一年六月～平成十四年八月）。

（ほ・こうえん　本学大学院博士後期課程）